

丸山眞男文庫の意義と可能性について

平 石 直 昭

I はじめに——この主題を選んだ理由

丸山文庫の記念講演会は一九九九年に第一回が開かれて以来、昨年までに一六回を数える。しかしこれまで丸山文庫自体が取りあげられることはなかった。これには、所蔵資料の調査や整理、公開が途上にある、文庫の全体像を語るのが難しいという事情もあった。しかし二〇一二年度から東京女子大学は、文科省の私立大学支援事業のプロジェクトを遂行しており、その副題は「丸山眞男文庫デジタルアーカイブの構築と活用」である。実際にこのプロジェクトが発足してから四年半の間に、文庫のデジタルアーカイブ化は非常に進み、それを活用した成果もいろいろ出ている。今では文庫の資料は (privacy) に関わるものを除いて) 全面公開され、丸山の自筆草稿類は、各自のパソコン画面上で自由に検索し読めるまでになっている。こうした点を考えると、プロジェクトを総括するこのシンポの一環として企画された今年の講演会は、丸山文庫の意義を問うよい機会といえよう。

ただ丸山文庫の意義を論ずるには、そもそも「丸山文庫とは何か」

について明確な理解をもつ必要がある。学問的な議論はまず定義から始まることを考えれば、この点は明らかであろう。ここで問題となるのは、丸山文庫のあり方が固定的・静止的でなく、不断に変化し発展していることである。それは多方面におよぶ。管理運営組織の変化、予算的な裏付けの多様さ(寄付金、外部資金、女子大の特別予算措置など)、所蔵資料の変化(追加寄贈)、調査・整理や実務メンバーの変化、資料調査の進捗状況や公開方法の変化など。さらに女子大は丸山文庫の関連事業として、公開読書会(ないし研究会)や公開授業を開いており、『センター報告』も毎年出している。丸山文庫の意義や可能性を十分に論ずるためには、これらを総合的に判断する必要がある。しかし時間の都合もあり、以下では、丸山文庫が女子大に設置されるに至った経緯や関連する主な動きをのべ、ついで文庫のコアをなす丸山の蔵書と草稿資料類に関して、調査から公開までの過程を紹介し、その上で文庫の意義や可能性を論ずることにしたい。

Ⅱ 丸山眞男文庫の設置までの経緯

丸山眞男が一九九六年八月一日に亡くなった後、彼の旧蔵書や草稿資料類の受け入れ先をめぐって、多くの人が奔走した。しかし最終的にゆかり夫人の意向により、東京女子大学への寄贈が決まった。そして一九九八年九月に女子大で受贈式が行われ、当時の船本弘毅学長とゆかり夫人との間に「覚書」がとりかわされた。夫人の挨拶によれば、生前の丸山は、自分の蔵書は著名大学よりも、ライブラリーの充実に苦しんでいる新設大学や研究機関、あるいは自治体の図書館に贈りたいと考えていたが、最終的には東京女子大学に貰ってもらえないか、という気持ちになったようだという。丸山がこの気持ちを告げたのは、女子大の卒業生で、丸山家の秘書的な役割を果していた牛田尚子氏に対してだった。

この話が牛田氏からゆかり夫人に伝わり、寄贈先の候補として女子大もあがることになった。そして九七年の十一月、夫人の意向を受けてICUの松沢弘陽教授が、東京女子大学の図書館長だった大隅和雄教授に対して受け入れの可能性を打診した。大隅氏は関係者の意見を確かめて受け入れ可能と判断し、松沢氏に返事した。これをうけて一二月初め、ゆかり夫人が、蔵書その他の資料を一括して寄贈したいという手紙を書かれ、大隅氏は理事会にとりついだ。こうして正式な受け入れが決まったものである。

松沢氏と大隅氏がかつて北海道大学の同僚であり、読書会を組織するなど懇意だった。日本中世思想史を専攻する大隅氏は東大文学部の国史出身だが、法学部の丸山の講義を聴講するなど、薫陶を受けていた。東京女子大学に丸山文庫が設置された背景には、こうした学問を介した人間関係が有効に機能した面がある。

女子大では、丸山の蔵書や草稿資料類を収めるため、図書館の地階に専用のコーナーを設けることとし、九九年春にその工事が完了した。そして丸山家からの蔵書等の搬入が始まった。丸山文庫の設置に関して、九八年九月という場合と九九年春という場合があるのは、先にふれた受贈式の時期と実際の搬入開始時期とがずれていることによる。

Ⅲ 関連する幾つかの動き

(1) 女子大では、九八年二月に大隅氏を委員長として丸山眞男文庫準備委員会が組織され、丸山文庫の設置とその後の蔵書や資料整理の問題にあたるための体制が整えられた。以後、二〇〇一年六月までの間、この準備委員会が丸山文庫関係の管理運営を担うことになる。

(2) 丸山家では、資料の仮整理に松沢望氏と牛田氏とがあたり、丸山の書入れや折込みがある本（便宜上、手沢本とよぶ）や貴重書に葉を入れるなどの選別作業を行った。また丸山家における蔵書の配列状態を写真にとり、資料として残した。丸山文庫では、図書館の通常の分類法によらず、丸山家での配列順によって書物が配架されているが、

それはこのときの写真による。丸山の思想が書物の配列順にも反映されているという考えに基づく。

（3）蔵書中の手沢本や膨大な草稿資料類をどのように一般の利用に供することができるか。この問題は早くから関係者によって意識された。これをうけて、丸山の指導をうけた研究者が丸山文庫協力の会を組織し、資料の調査や整理に従事する体制がとられた。松沢氏の呼びかけで、植手通有、飯田泰三、宮村治雄、渡辺浩、平石の六名が参加した。『丸山眞男集』『丸山眞男講義録』の編集に従った者たちである。のちに作業の進行につれてマンパワーの不足が痛感され、若手研究者の協力をあおいだ（現在の会員数は、植手氏が亡くなり、荻部直、眞壁仁、中田喜万、河野有理を加えた九名）。

以上によって準備段階の基本的な組織が整い、九九年春以降の図書館への搬入をうけて、九九年一月から、草稿資料類の調査が始まった。予算面というと、二〇〇〇年七月には、丸山夫人からの多額の寄付金を原資とする「東京女子大学丸山眞男文庫維持運用基金規程」が制定された。また二〇一一年一〇月七日に夫人が亡くなられた後、丸山家の不動産と丸山の著作権は女子大に遺贈された。文庫の資金的な裏づけの面で、夫人の貢献は非常に大きい。

IV 各種資料の調査から公開にいたる経緯

丸山家から女子大に寄贈された資料は、大別して書籍（図書・雑誌・

楽譜の別がある）と草稿資料類とに分かれる。そして書籍と草稿資料類とは資料のあり方が違い、それに応じて整理や分類、公開までの進捗状況や、作業の担い手も異なるので、以下では（1）丸山の旧蔵書と、（2）丸山の草稿資料類とにわけて紹介する。

（1）書籍に関しては、図書館員（中村淳介司書）が精力的に整理を進め、二〇〇〇年十二月に一応完了した。その整理を元に『丸山眞男文庫寄贈図書資料目録』が作られ、二〇〇一年三月二日に女子大で丸山夫人に贈呈された（関係者にも配布）。図書一万七四〇〇冊、雑誌一二七タイトル、計約三万六〇〇〇冊であり、約二年という短期間での完成は、図書館員の熱心な仕事ぶりを示している。ゆかり夫人は非常に感激され、「奇しくも明日は丸山の誕生日にあたります。この目録のことを報告させていただきますが、どんなにか喜ぶことと思います」と謝意を表された。またこの折に船本学長から、丸山研究を中心にした比較思想に関する研究教育の拠点に女子大をしたいという希望が述べられ、大隅氏から「丸山文庫の発展的構想案」が説明された。この「構想案」の具体化として、丸山文庫準備委員会は二〇〇一年六月に解散し、かわりに同年一〇月、丸山眞男記念比較思想研究センター（仮称）が開所された（センター長は大隅氏）。そして翌年一月の理事会で、比較文化研究所に附置される形で丸山眞男記念比較思想研究センター（略称「丸山センター」）の設置が正式に決定され、現在につながる丸山文庫の管理運営体制ができた。

なお二〇〇五年三月に、この丸山センターの機関誌として『丸山眞男記念比較思想研究センター報告』の創刊号が出され、以後ほぼ毎年三月に公刊されるようになった。当時のセンター長だった黒沢文貴教授の尽力によるもので、とくに創刊号は、丸山文庫設立前後から二〇〇五年当時にいたる各種の資料や年譜を収録しており、資料的な価値が高い。

話を元に戻すと、『図書目録』が完成した二〇〇一年三月時点で、丸山家からの寄贈はまだ続いており、今回の『目録』は二〇〇一年二月半ばまでに贈られたものを対象とし、それ以後のものはいずれ増補版を作るはずだった。またこの『目録』は丸山家に対して寄贈書目の明細をできるだけ早く報告することを目的としたため、発行部数もわずかで内容も簡略を旨とした。逆にいえば、国内外の研究者に資するために本格的な目録が必要ということは当事者によって自覚されており、その刊行計画もあった。

しかし手沢本の情報を反映した目録を作るには非常に時間がかかり、しかもいったん冊子体で作ってしまうと、あとで増訂が必要になった場合に改訂にくい。作業を進める中でこうした点が自覚され、冊子体のかわりに電子媒体でデータを構築し、それを一般に提供する方針に転じた。したがって丸山文庫の書籍に関する目録は、冊子体としては二〇〇一年三月のものしかない。しかし各地の図書館から入手したいとの要望があり、女子大は外部資金を獲得して、目録の新版の刊

行を計画していると聞いている。

他方で手沢のない図書はなるべく早く公開することが望ましく、そのために中村司書が所蔵本に関して、松沢・牛田氏の選別を元にして手沢の有無を一冊ごとに再点検し、手沢本のリストを作る仕事を始めた。問題になったのは手沢のごく少ない本（一―二箇所程度のもの）をどう扱うかであった。手沢のない本と同様に公開するという意見と、それでは手沢箇所が不明になる恐れがあるから閉架におくという意見があった。方針を決めるためにも、手沢の質と量とがどれ位かについて全体像をもつ必要があった。そこで協力の会の一名が、二〇〇四年秋から、中村司書の作ったリストを元に手沢本の調査に入った（約五八〇〇冊）。一応の目安として、一冊について、一―二箇所程度の折込みや書込み（下線、傍線、レ点などを含む）があるものをグレード1、それが数カ所に上るものをG2、さらに多い本をG3、とくに重要なものをG4とする、という規程で分類した。翌年三月までに一応のグレード付けを終えた。そしてG1本については、結局、閉架書庫に置くこととした。

こうした準備を経て、二〇〇五年四月から手沢のない図書（約二万二二〇〇冊、寄贈図書の約七割）の公開をはじめた。ただこの結果、それまで丸山家での配列順序に従って並べられていた本のうち、手沢本（＋貴重書等）が閉架書庫に別置されることになり、元の配列順序が崩れてしまった。この元の順序を画像上で再現したのが、二〇一五

年三月に公開した丸山文庫のバーチャル書庫である。この作成にかつての写真が役立ったのはいうまでもない。

話を元に戻すと、手沢のない図書を公開した後、手沢本の保存と公開の方法をめぐる関係者が何度か協議した。原物の劣化を防ぎ、手沢箇所が後世に伝わるようにするにはどうすればよいか。マイクロフィルム案と、電子化してPDF画像として提供する案とがあった。議論の結果、後者が採用され、二〇〇六年一月から三月にかけて、業者が手沢箇所の同定作業を行い、翌年にかけてグレート2以上の約二三〇〇冊が走査された。

ただ業者のとった画像が丸山の書込みや折込み箇所のものか否か、またとるべき箇所の見落としがないか等につき、画像と手沢本とを照合して点検する必要がある、二〇〇六年の春から一名がこの作業を始めた。しかしすべての頁を繰って画像との一致を確認する必要がある等の諸事情で非常に時間がかかり、他のメンバーの協力もえて、ようやく二〇〇九年中に全部の画像資料の点検をおえることができた。

こうした準備をへて、二〇一〇年七月に閉架図書の公開を始めた。書込み等の箇所のPDF画像を女子大図書館の専用端末で閲覧するという方法をとっている。書籍の場合、元の著者の著作権や出版元の版権という問題があり、それらと抵触する恐れがある。そこでネット上での公開はできないわけである。（なおこれとは別に、丸山の書込みがとくに多い二〇〇冊については簡易複製本を作り、二〇〇九年七月

から公開している）。

以上で図書の手沢本の整理と公開はおわったが、まだ雑誌と楽譜が残っている。このうち雑誌への書込みに関しては、協力の会の一名が二〇一〇年度に調査をはじめ、電子化が必要な資料を同定し、業者に走査作業を依頼して、翌年度中に検収をおえた。そして二〇一二年五月に、手沢の有無を問わず、約一万八〇〇〇冊を全面公開した。丸山の書込み等のない一九六一年以降の発行雑誌（約一万二五〇〇冊）は開架におかれ、他方、閉架書庫には、丸山による書込み等のある雑誌、一九六〇年以前に出された雑誌、丸山家で書庫以外の書斎・寝室・応接間にあつた雑誌などが置かれている（約五四〇〇冊）。閲覧方法は図書と同じである。

最後に楽譜類に関して。土合文夫教授が二〇一〇年春から二〇一一年秋にかけて調査し、「丸山文庫楽譜蔵書の調査をひとまず終えて」を発表した『センター報告』第七号）。これをうけて二〇一三年五月に、丸山による書込み等のない楽譜類、約一三〇点を開架で公開した。また書込み等がある楽譜については、二〇一四年三月から一年かけて段階的に公開した。いまでは書込み等のある楽譜四三四点がすべて閲覧できる。閲覧方法は図書・雑誌と同じである。なお楽譜の調査を土合氏に依頼したのは当時の現代教養学部長安藤信廣教授であり、安藤氏は丸山センター長を二期四年、現代教養学部長を二期四年、今はまた

図書館長として、丸山文庫の発展のために尽されている。現在のプロジェクトの推進も氏の尽力による所が大きい。

以上で、文庫の蔵書の公開はすべて完了した。一九九九年春の図書館員による調査開始から数えると一六年かかったことになる。しかしそれだけの時間をかけることで、楽譜も含めて丸山の書込み、折込み箇所がすべて電子画像として保存され、また一般に公開できるようになった。このことの学術的な意義は非常に大きいと考える。

(2) 草稿資料類の調査から公開までの経緯

前にも述べたように、この作業には主に文庫協力の会のメンバーがあたった。調査開始は一九九九年一月初めで、丸山家から文庫に搬入された資料類は、仮の番号数でいうと約一〇七〇件だった。しかし中には段ボール一箱に一つの番号が付されているような場合もあり、実際にどれほどの分量になり、調査にどれほど時間がかかるのか、見当がつかなかった。

調査を開始する前に、調査票の書式が決められた。当該資料が丸山の自筆か他筆か、コピーかの別。タイトル、執筆ないし作成時期、枚数、用紙の大きさ、既刊の丸山著述との関係、未発表か否か、さらに当該資料に関して特記すべき事項があれば、その記録、さらに学術的価値や資料の劣化度の評価など。これらを一点一点の資料に関して調査していった。約一〇〇〇件あったので、五人が手分けしてほぼ二〇〇件ずつ分担することにした。ただそのうち四人は当時五〇歳代半ば

であり、勤務先大学で管理の役割を担い、十分時間が割けないというような事情が生じたりし、四年後の二〇〇三年秋に、調査を終えることができた（第一段階）。

これで草稿資料類の内容は一応明らかになった。しかしこれらを公開するためには利用者が検索するための目録が必要であり、そのためには各資料を適当な項目に分類しなければならない。これには既存のモデルがなく、丸山が遺した資料に即して新たに項目を考案する必要があった。そこで整理票・分類票を作り、調査票の情報に基づいて、各資料を整理票・分類票に記入していった。この作業を進めるため、前にのべたように四人の若手研究者の協力をえた。結果として二年後の二〇〇五年一〇月に、この作業を終えることができた。

ただこの分類作業は数名が分担して行ったので、個々の資料をどの項目に分類するかに関して、不統一の生じている恐れがあった。そこでいま述べた分類作業と並行して、二〇〇四年九月から一名が、他のメンバーによる整理票・分類票への記入を原資料と照合しつつ点検する作業をはじめ、二年を経て二〇〇六年八月にその作業を終えた。つまり整理分類に三年を要した（第二段階）。最初の調査開始から数えると一九九九年一月から二〇〇六年八月まで、約七年かかったことになる。なおこの作業と併行して、資料の劣化を防ぐ目的で、各資料を中性紙のケースに入れるという作業も、若手の協力をえて終えることができた。

以上の資料整理と分類作業を経て公開の準備作業に入ったが、この過程でまた幾つかの問題にぶつかった。①利用者の便宜を考えて、二項目以上に重複してリストアップされている資料を一項目にしぼることにしたので、その改訂が必要になった。②当初は冊子体の形で目録を作ることを考えていたが、予想される業務量の膨大さからデジタル資料としてパソコン上に漸次登録してゆく方法をとることにした。すると資料のタイトルをより簡潔なものにする必要が生じた。③資料が入れられていた封筒には、丸山が付したタイトルや女子大搬入以前に関係者が付したタイトルをもつものがあつた。しかし封筒の中身を正確に反映していない場合があり、それを公開用のタイトルとすれば、利用者に不便をかけることになる。このため中身と一致するタイトルに改訂する必要があつた。④デジタル資料で提供することとして、多くの草稿資料類の中から、どの資料をデジタル化するかを選別し、また走査する作業が必要になった（第三段階）。

こうした作業を遂行する上で、新たに若手研究者に加わってもらい大きな協力を得た（佐藤美奈子、山辺春彦、川口雄一。のちプロジェクト開始後には、金子元、播磨崇晃、堀内健司がこれに加わる）。これらの人たちは、女子大関係部局との連絡調整、各種の会議や催し物のための準備と記録の作成、データベースへの情報入力、公開を決定した資料の走査など、多方面にわたり「縁の下の方持ち」的な役割を担っている。この人たちの尽力なしには文庫の現在ではなかったことを明記しておきたい。

こうした準備をへて、二〇〇九年七月に草稿資料類の部分公開を開始した。分類大項目は第一から第一五までであるが、そのうち、第一部（第七部の約三〇〇〇点である。公開のために丸山文庫のホームページを開き、ノート・草稿類用のOPACの運用を開始した。つづいて翌年七月に分類大項目第八部の約三〇〇件、さらに二〇一一年七月に、分類大項目の第一〇部（第一五部の約七〇〇件。これで丸山文庫に所蔵されている草稿類はすべて公開されたことになる。第九部が欠けているのは、その項目が書簡にあてられ、非公開としているからである。

V 丸山文庫の意義と可能性について

（1）丸山研究を深める上でもつ意義。最晩年に丸山は自己を思想史学者とよび、思想家ではないと語った。しかし彼の思想史研究は、学問的関心と同時に、時代に対する批判や抵抗という超学問的な動機や関心によって媒介されている。『日本政治思想史研究』、『超国家主義の論理と心理』、『政治の世界』、あるいは福沢の著作に強く惹かれた動機など、いずれもそうである。したがって彼の思想的側面をみないと、丸山の作品を本当に理解したことにならない。また彼の学問は彼の人格形成史、個人史と不可分でもある。別言すれば、著述に現われた彼の学問や思想は氷山の一角にすぎない。巨大な彼の全体像に迫る上で、この文庫は多数の貴重な資料を蔵している。二〇世紀の日本の知識人がいかに時代の課題と格闘しながら、思想と学問を形成して

いったか。丸山という巨人に即してその足跡を辿れる。

丸山は戦後民主主義の旗手といわれる。「戦後民主主義の虚妄に賭ける」という言葉がインパクトを与えた。しかし敗戦後の新聞紙面を読めば、民主主義の必要やその特徴を論じた論説は丸山に先がけて数多くある。丸山の特徴はむしろ、敗戦後の半年間、自分の内部で対話を重ね、戦前天皇制の下で自分が無意識裡に身につけていた価値意識や思考様式を対象化し、そのようにして人民主権の立場にたどり着いた点にある。その転向経験が大きい。いいかえれば、民主主義者になるには内面の革命が必要ということである。その原点に遡って、もう一度民主主義者として、あるいはリベラルとして自分を鍛え直す必要がある。その作業を各自がくり返し行つてゆくための重要な素材が、この文庫には蓄積されている。

(2) 日本の知識人運動や、内外の知識人がつくる知的交流の軌跡を明らかにする資料が数多くある。吉野源三郎が整理した平和問題談話会関係の資料が、二〇〇三年二月に岩波書店から寄贈された(段ボール三箱分)、また二〇〇四年八月には、丸山家から膨大な量の丸山宛書簡類が追加寄贈された(段ボール二六箱分)。privacyに関わる面があるため、調査には慎重な配慮が必要だが、内容が学術的に重要であり、またprivacy問題をクリアしている書簡については、著作権継承者の同意をえて、試行的に公開する方向にむかっている。『センター報告』第九号(二〇一四年三月)に掲載された吉野源三郎から丸山宛の書簡

三六点の覆刻はその最初の例である(竹田行之氏校注)。来年三月刊行予定の第一二号には加藤周一(含、矢島翠)からの来簡が覆刻される予定になっている(鷲巢力氏校注)。

(3) 個人の文庫を作つてゆく際に、どんな条件が必要なのかを検討する上で実験的な例として意義をもつと思う。たとえば、蔵書や草稿資料類を収める書庫スペース、資料の調査や情報入力等を行う作業用スペース、資料の調査や整理にあたる専門家の確保、情報入力やアーカイブのシステム維持にあたるスタッフ、資料の出納要員、これらを裏づける予算の確保と管理運営組織の体制などである。これらの点で、女子大内外の関係者や関係部局がそれぞれの役割をはたし、緊密に協力することで、現在の丸山文庫はできている。

二〇世紀の日本は優れた多くの人文・社会科学者をうんだ。しかしその蔵書や草稿類は遺憾にも散逸するか、文庫として残る場合も、幾つかの大学や機関等に分散するケースが多いと思われる。それにはそれぞれ事情があつたはずで軽々に論ずることはできないが、知的遺産の継承という点では、一括所蔵と公開が望ましいのは確かである。そうした点で丸山文庫は一つの範例としての意義をもち、世界の学術界に対して大きく貢献していると信ずる。

また日本に関していえば、日本に人文社会科学のしつかりとした伝統を作り上げる上で、一つの里程標としての意義をもつと思う。晩年の丸山は、大学は過去の知識の貯蔵庫だと述べた。そこにくり返し立

ち戻ること、現在の状況を相対化し、新たな分析視点や解決のための示唆を得ることができる。日本社会に学問的な思考を根付かせてゆくためには、市民が共通の「古典」の伝統を創ってゆく必要があるのではないか。広く公開された丸山文庫は、そのための有力な拠点になると考える。

質疑応答

司会（安藤信廣） 平石先生、どうもありがとうございました。それでは時間がだいぶおしておりますが、まだ少し時間がございしますので、ご質問がありましたらどうぞ挙手をしていただきたいと思ひます。

—— 本日はありがとうございました。吉野源三郎が関わっていた平和問題談話会関係の資料と書簡三六点についてお話がありました。この中で、平石先生がご存知の範囲で、どういったやりとりがされている書簡なのか、ちょっと教えていただければありがたいのですが。

平石 はい、吉野書簡は二〇一四年三月発行の『丸山眞男記念比較思想研究センター報告』第九号に掲載されております。ぜひお読みいただければと思います。

一部を紹介しますと、たとえば岩波書店が『日本思想大系』を出しました。これは日本思想史を研究していくうえで不可欠のテキストを体系的にまとめたものですが、その編集委員がたくさんいる中で、吉野さんが何といつても頼りにしていたのは丸山眞男と吉川幸次郎さん

だったということが、それを読むとわかります。それから、ラッセル財団の日本協力委員会について、そのメンバーをどうするかとか、運用方法をどうするかとかを相談する内容のもの。また、安倍能成さんが平和問題談話会をどのように今後進めていくかについて悩んでいて、丸山さんは非常に安倍さんに信用があるから、ぜひ会って話を聞かせてあげてくださいという内容のものなどです。かなり機微にわたる記述があります。

平和問題談話会の関連資料の中身を私はまだ見ていませんので、詳しいことは存じません。松沢弘陽さんが内容をよく調査されたので、ご存知のはずなんですけれども本日は欠席されています。

ちょっと補足しますと、そもそも「協力の会」というものを呼びかけたのは松沢弘陽氏ですし、それからこの一六、七年くらいにわたって丸山文庫の作業に一番時間を使われたのは、公平に言って、松沢弘陽氏ではないかと私は思っております。やはり丸山の思想・学問、あるいは人格というものにたいする松沢さんの敬仰と、それから丸山を支えた丸山夫人にたいする松沢さんの敬意というものが、そういうサービス・アンド・サクリフェイス——東京女子大のモットーですけども——そういう心構えが文庫の作業をやられた根本にあるのではないかと、私の推測ですけれども思っております。

司会 それではほかにいかがでしょうか。

—— 先生方の非常に貴重な努力で、後進にとつてたいへん有意義な文庫が形成されたこと、改めて御礼申し上げたいと思います。質問

は、配布資料の七頁の二段落（本書一二二頁）のところで「転向経験」とあるんですけども、これは日本が敗れたということがきっかけで生じたのか、あるいは新しい人権なり民主主義というものを受け容れなければならぬということが契機になったのかということ。また、それは何からの「転向」なのかということです。

平石 ご質問、ありがとうございます。「転向」という言葉は、丸山自身が『丸山眞男回顧談』のなかで使っていたと思います。てつとり早くいえば、戦前の天皇制というのを立憲主義的に解釈して、それはやはり守るべきものだと思える。いわゆるオールドリベラリズムと彼がいつていたものですね。そこから人民主権という立場への「転向」ということだと思います。

ご存知のように、「昭和天皇をめぐるきれぎれの回想」という文章があります。そこで丸山がいつていることは、敗戦後半年間の模索を経て、ようやく論文「超国家主義の論理と心理」の立場へとたどり着いたということですね。そのことをここでは「転向経験」と申し上げたということです。

司会 まだご質問があるかと思いますが、あと一人だけ。

—— 一般に公開されているシンポジウムなので、一般のレベルでちょっとお話しします。今日のテーマとずれてしまうのですが、この東京女子大学の中で学生さんたちとの丸山文庫との関わりというようなことについて、どんなふうに取り組まれているのかというようなことをお話しただけだと思います。

高等学校の教科書では、私が今もっている平成二三年版ですと、「あることと「すること」」が載っています。そういう本で学習した高校生が入学したときに、まさに丸山文庫があって、文庫にかかわらなくては卒業できないようにしてもらいたいなと思ひまして（笑）。私、実をいうと芦花公園のそばにある今の芦花高校にいたのですが、私のころは徳富蘆花の話なんか、一回も授業の中で触れてくれないのです。非常に今でも、当時の国語の先生は変だなと思っているんですけど。そういう問題意識があつて。

平石 たとえば今日、運営スタッフとして女子学生が参加していますけれども、彼女たちの中には丸山の著作や関連書を読んで、感想文を書いたりしている人がいると思います。受付付近に、女子大生たちが書いた感想文が並んでおりますので、ご覧ください。

—— どうもありがとうございます。

司会 東京女子大の教員として一言補いますと、図書館と丸山眞男記念比較思想研究センターが共催して、「東女生が挑む 丸山眞男展」という企画をこの間やっており、その一端として、丸山眞男の著作を読んだ学生たちの感想文などが受付付近で展示されています。なるべくこの丸山文庫の貴重な資料を、私ども東京女子大学の教育の場にも生かしていきたいと努力しております。まだ努力が足りませんけれど、さらに発展させていきたいと思っております。

それでは、時間が過ぎてしまいましたので、午前の部は以上で終わります。平石直昭先生、どうもありがとうございました。